

別府温泉

高浜虚子

青空文庫

道路のアスファルトがやわらかくなって靴のあとがつくという
しやくねつ 灼熱の神戸市中から、埠頭ふとうに出て、舷梯げんていをよじて、紅丸くれないに
 乗ると、忽ちたちま風が涼しい。

ここから神戸市中を振り返って見ると、今まで暑さにあえいで
 おった土地も、涼しげな画中の景となつて現れて来る。そうして
 その神戸埠頭ふとうが今はもう視界から去つてしまふ頃になると、左舷
 には淡路島ちかが近より、右舷には舞子まいこ、明石あかしの浜が手に取るごと如く見
 えて来る。私は甲板の腰掛こしかけに腰を下して海風かいふうの衣袂いべいをひるがえ翻すに

任している。

先に帆ほ襖ふすまを作つて殆ほとんど明石海峡をふさいでいるかと思われた

白帆も、近よつて見るとかしこに一帆ほここに一帆ふうという風に、汪お

洋うようたる大海原の中に真帆まほを風にはらませて浮んでゐるに過ぎない。

それに引かえて往ゆきかう蒸気船の夥おびただしきことよ。鉄甲板の荷物

船が思いきり荷物を積んで、深く船体を波に沈めて、黒煙を吐い

て重そうに進んでゐるのもすでに三、四艘そうならず追い越した。軽

快な客船も、わが船の十三ノツトというにはかなわないで暫しばらく併

行して進んでゐるうちに遂にあとになる。向むこうから来る汽船はす

れ違つたと思ううちにもう見えなくなる。すべてこれ等の汽船は

坦々たる道路の如くこの海原を航行しているのである。

さすがに白熱の太陽が大空に君臨している間は、左右の島も汪洋たる波も、その熱に焼きただらされて、吹き来る風もどことなく生暖かい。その風は裳裾や袂を翻し、甲板の日蔽をあおち、人語を吹き飛ばして少しも暑熱を感じさせないのであるが、それでも膚に何となく暖かい。

太陽が小豆島の頂きに沈みかける時が来ると、やがてこの船の極楽境が現出するのである。今まで青黒く見えておった島々が薄紫に変つて来る。日に光り輝いておった海原に一抔の墨を加えて来る。日が小豆島の向うに落ちたと思うと、あらぬ方の空の獅子雲が真赤に日にやけているのを見る。天地が何となく沈んで

おちつ
落着いて来る。と、その海の上を吹いて来る風が、底の方から一脈の冷気を誘うて来る。その冷気が膚はだえに快よい。

ぼしよく ぼとん
暮色が殆ど海原を蔽おおい隠す頃になると、小豆島の灯台が大きくまたたきそめて、左手には屋島やしまの大きな形が見えそめて来る。もう高松に着くのに間がないことを思わしめる。

後甲板に活動写真をしているのを見に行く、写真のうつる布きれが風に吹かれていたので、映写は始終しよつちゆう中はためきどおしである。

高松の埠頭ふしとうに着く頃はもう全く日が暮れている。紅丸くれないがその棧橋に横着けになると、忽たちまち沢たくさん山の物売りが声高くその売る物の名を呼ぶ。

「この棧橋は鉄筋コンクリートで出来たもので、恐らく日本の棧

橋のうちで一番立派なものでしょう」と事務長が話した。その棧橋の両側には三艘そうばかりの船が着いている。先さきに途中で追い抜いた木浦丸もつぽも後おくれてはいつて来る。船全体が明るくともつて、水晶だま珠たまのようなのが一艘おる。これは宇野と高松との鉄道連絡船の玉藻丸たまもである。

船が棧橋にとまっている間は風が死んでむし暑い。やがて棧橋を離れて大海原うかに浮またむと又涼風はだえが膚くにしみて寒くい位らいである。私は臥床ねじこにはいる。朝七時半起床。もう佐田さたの岬さかがそこに見え、九州の佐賀関くはらの久原くはらの製煉所の煙突を見る所まで来ている。

朝影のある甲板は涼しい。

別府はもう眼の前にある。

観海寺は彼処、商船会社の支店は其処、とボーイが指さしているうちに棧橋に着く。

すぐ自動車で亀の井旅館に着。温泉にはいる。

別府は土地の下面に温泉である。それが第一の天恵である。瀬戸内海という大道路がすぐ玄関に着いている。これも天恵の一つである。

温泉に入るや瀬戸内海の昼寝覚。

この前来たのは大正九年であつたから、今から八年前になるが、

出迎えてくれた土地の人は、

「別府も八年前とは大変変りました」と誇り顔にいった。紅丸の甲板から別府市外を概観した時は格別変ったようにも思わなかった。棧橋から亀の井旅館に来る途上の光景も格別変ったようにも思わなかった。が、ただ私の通された所は洋館のホールであるだけが変わっていた。

「何時^{いつ}建て増しをしたのです」と聞いたら、
「一昨年^{げつ}一月でした」と答えた。

その夕方五時から日名子^{ひなこ}太郎氏や市の温泉係の中島辰男氏に案内せられて地獄廻^{めぐ}りに出掛けた。

先^まず海岸通りを北に自動車を駆った。道幅がこの前通った時よ

り広いように覚えた。

「この道は新らしく作ったのですか、大変広いようですが」と聞いて見たら、

「大正十年に作った八間幅けんの道路です」と答えた。それから又、また

「この上の方の鉄輪かんなわ温泉から鶴見の方へ出る三間幅の道路も新らしく出来ました。各地獄や温泉を連絡する新道路が出来たのであります、皆自動車で通れます」とのことであつた。

この前、日名子氏ひなこに案内されて地獄廻りめぐをした時は、人力車でなければ通れなかつた。所によると徒歩でなければ通れなかつた。それも、朝出掛けて遂に鉄輪温泉に一泊して、二日ばかりであつたことを思うと、夕方の五時頃から涼みがてらに自動車に乗つて

出掛けるなんか、随分変化したものと思った。

先ずかめがわ亀川温泉を過ぎて血の池地獄を見た。十年に一度大活動をはじめると、今年が丁度その十年目に当たり、おおあれ大荒に荒れるそうである。今朝も大活動をやったとのことである。ほとり
の樹木などたくさん沢山に枯死しているのはそのねつでい熱泥を吹き上げた処
である。赤い泥の沸ふつふつ々と煮え立っている光景は相変わらず物すご
い。

次つぎにかまど竈地獄を見た。これは地中の鬼がうめくような声を発し
て、がんくつ岩窟の中から熱気を吐き出しているのである。その熱気で
蒸したアンコのないまんじゅうがおいしかった。

しばいし芝石温泉という、湯滝のある、けいこく谿谷に臨んだ温泉を過ぎて、

紺屋地獄を見た。これは紺色をした泥池の底から、同じく怒るが如くつぶやくが如く熱気を吐いておるのである。驚くべきことには近所の青田の中にも数ヶ所同じような処がある。一步誤ればその中に落ち込んで命を落さねばならぬのである。現に誤つて死んだという人も沢山あるのだそうである。鶏卵をその泥土からわく湯気に置くと二、三分で半熟になり殻が真黒になる。その真黒な鶏卵を一つ食べて見た。

次に坊主地獄を見た。これもやや大きなにごつた熱湯が沸々とわき上つているのである。その有様が沢山の坊主頭を並べているようだからその名があるのだともいうし、又昔円内坊とかいう坊さんが二重柵をつかつて百姓から米穀をむさぼり取つたがた

めに、一夜の中にその邸宅が陥没して、この坊主地獄が現出したとの伝説もあるそうである。後ろの山に円内坊十五尊像という半ば壊れた十五の石像がある。ここは豊後湾を見晴らして景色がいい。かつて遊んだ日出の人家も一眼に見える。アンコのあるまんじゅうがまたうまい。

次ぎに地獄中の女王、海地獄を見た。この地獄については別に記述するところがある。地獄中の最も大きなもの、又最も美しいものである。もうこの海地獄にある間に七時を過ぎた。

それから鉄輪温泉に行った頃は店頭の電灯がともっていた。そこで鉄輪地獄というのを見た。この鉄輪地獄というのは以前来たときはなかったもので、その後地下を掘っていると俄然として爆

発したので新らしく地獄が現出したのだそうである。

この地獄には吸入室とかあんほうしつ罨法室とかの設けもうもある。

そこでちよつと以前泊つたことのある富士屋の主婦おかみさんを訪ね

た。もとの通り太っていることは明かだったが、顔かたちを十分に識別することは出来ないほどに薄暗くなっていた。

夜路よみちをひた走りに走つて鶴見地獄に出た。この鶴見地獄という

のも昨年の春から爆発したものだそうである。泥土でいどを交まじえない清せいい透とうな熱湯を噴出している。

別府はこの前来たときよりも変つてゐることは明かになつて来た。二大地獄の新たに増したことだけでも争うことの出来ぬ著名な変化である。

土地を掘って温泉を出すということは、別府では随所に行われておる。別荘地などは一軒の小さい建物にも必ず温泉がついてい
る。

別府の停車場には温泉の洗面所がある。小学校にも温泉の浴槽がある。警察にも同じく温泉の浴槽がある。温泉が空しく噴き出して夏草の上に流れているところは各所にある。

田の中に小さい小屋がけがしてあるのは何のためかと思うと、皆そこには温泉が出ているのである。温泉の出ているということひょうぼうを標榜して、そこを別荘地えらに選ぶ顧客を待っているのである。そうして堀ぬき井戸を掘るような装置が至るところにしてあるのは、皆新らしく温泉を掘っているのである。

その掘ったところが俄然^{がぜん}爆発して大量の熱気を地上に噴出するようになったところが、新らしく出来た鶴見地獄や鉄輪地獄である。

温泉の数^{すう}はかず限りもない。温泉場と名のついた別府、浜脇、観海寺、亀川、鉄輪、芝石、堀田、明^{みょうばん}礬、新別府などがある。別府市内だけでも浴場が十あまりある。その他旅宿や個人の家には数限りなく温泉が湧出しているのである。

或^{あるひと}人は今の別府は南の方に僻^{へきざい}在^いしている、亀川の東にある実相寺山を中心として、大きな泉都^{せんと}を建設せなければならぬといっている。或人は別府のうしろにそびゆる四千五百尺の高峰鶴見岳を中心にして、各所に点在する温泉郷を連結せなければならぬ

と説くものもある。

地熱を応用してすべての動力の基本としようとする地熱研究所というのがある。これは高橋廉れんいち一氏の監かんするところである。その結果がよいところから、東京電灯が玖珠郡飯田村湯坪ゆつぼに又地熱研究所を設置している。

温泉栽培株式会社というものがある。これは温泉の熱を利用して果物を栽培しようというのである。

又地球物理学研究所またというのがある。これは京都大学がこの研究所を設けて温泉に関する基本的調査を開始しておる。

外ほかに温泉療養研究所というものが、九州大学により新たに開始されんとしている。これは医学の方面から温泉を研究しようとする

るのである。

海軍療養所もあり、鉄道療養所もあり、満鉄療養所もあり、台湾婦人療養所もある。

海岸には砂湯というものがある。これは潮の引いた時分に、その砂浜に五体を埋め、下から湧出する温泉に浴するのである。日本人はもとより西洋人、支那人なども同じように砂に埋まっている。妙齡の婦人もある。手足の萎なえた老人もある。

それのみならず、この別府の海には底にかす限りもなく温泉が湧出しておるらしい。その証拠は海底の水が暖かくて、熱帯地帯の海にいる美麗なる魚介の類るいが棲息している、それらが採取されてここの魚市場に出るとのことである。陸地至るところに温泉の

湧くことを思えば、それも無稽むげいの説ということは出来まい。

のみならず、海水浴をするのにも、潮はあまり冷めたからず、快適の温度であるとのことである。

豊後湾ぶんごの風光は美しい。ここから日出ひじを眺めた趣おもむきなどはナポリに似ているとの評判がある。

何にせよ別府の大いなる強味は地下ことごと尽く温泉であるということである。土地の人は泉都せんとと唱えて、日本の別府でない、天下の別府であると誇っている。泉都という言葉は面白くないが、湯の都たることは首肯しゅこんされる。

然しかしながら、観海寺は観海寺土地株式会社というものの経営に移って、同じくその経営になる住宅地が、夏草を生やしつつ沢たくさ

山に客を待っている。文化村という新住宅地も五、六軒新しく建ったままで人の住むのを見受けない。海岸の風光を台なしにした埋立地にも別荘が建ったままで未だ買手のないものが多い。海地獄の熱湯を引いた新別府の土地株式会社というものも出来ておる。これもあまりはかばかしくないようだ。不景氣風に吹きまくられて湯の都の発達もちよつと小頓挫の形にある。

別府市と温泉、地獄の散在しておる附近の村との連絡が思わしくないようである。これは温泉地一帯を別府市に編入して一つの行政区域にしたいものである。各地獄の遊覽に一々料金を取るが如きも廃止したいものである。これも個人の有になつておるために不便である。大別府を建設するためには第一着手としてこれ等

は市有とすべきであろう。

二

午前六時に眼ざめて顔を洗ったばかりで、飯も食わずに自動車に乗って、私は五里の山里を由布院村へと志した。亀の井主人油屋熊八氏東道のもとに、日名子太郎氏、満鉄の井上致也氏、大阪毎日別府通信所の本条君と共であつた。

鶴見の山背やませを越える頃になると由布の峰がポカリと現れはじめた。豊後富士ぶんごの称があるだけあつてその尖峰せんぼうが人の目をひく。富士なれば、誰かの絵たれで見た扇をなかばたたんで倒さかさに立てたよ

うな景色であつた。その富士をうしろにして展望すると、すぐ天の一角に海を見て、佐田の岬、佐賀関あたりがほうふつと見える。又またはるかうんさいかの雲際そぼに祖母山脈、又それに並行した二、三の山脈を見はるかして景色がよい。それからしばらくの間は変化のない山まみち路で、やがて小田の池、山下の池などを見、放牧された牛の行手をふさぐことなどがあつて、漸ようやく下り路になつた。

「時間が後おくれると靄もやが晴れてしまう」と熊八氏が心配していたが、山路が開けて一帯の谷を見渡した時に、

「ああ靄はもう晴れている」と落胆した。それでも一いちまつ抹の濃い靄はなお白くその辺を逍遙さまようていた。これが由布院村であつた。取りあえず亀の井別荘の亀楽園きらくえんに憩う。この別荘は瀟灑しょうしゃ

たる小さい別荘であるが、竹縁たけえんに腰を下ろして仰ぐ由布の尖峰は類たぐいなく美しい。前面は斧おのの入らぬ茂った山で、その円まるい山の肩のところから突とつとして起おこつた二つの尖峰——ここからはその峰が二つに別れて見える——が青空にそびえ立っている様さまはえがくが如ごとく美しい。

この由布院村にもたくさんたくさんの温泉が湧出しておる。現にこの別荘のすぐ傍そばに錦鱗湖きんりんという池があるが、その池の岸边にも温泉が湧出しておつて、その岸边の水は温かいとのことである。

その錦鱗湖に行つて見たが、池の形も人工が加わつておらず自然で、沢たくさん山の浮草の生えているさまも面白く、又岸またにある藁家わらやの重なりあつて建つている様さまも面白かつた。

私たちはこの別荘で熊八氏の用意してくれたサンドウィッチを食し、やがて又自動車に乗つて、更に六里の山路を越えて、飯田はんだ高原に行くことになったのである。

みち路は前の山路よりも更に悪くつて自動車の動揺がはげしい。二、

三里も来たらうと思うころ、お花畠ともいふべき秋草の咲いてい
る所に出た。女郎花おみなえし、撫子なでしこ、女郎花に似て白い花おとこえし（男郎花

とも違う）それにあざみなどが咲き満ちているさまが美しかった。
くえんたいら

崩くえんたいら平くじゅうという山を一巡すると湧出山わくでという山が見え出す。続

いて九重山くじゅう、久住山くじゅう、大船山たいせん、黒岳などという山が前面に

現れた。あたか恰も列座の諸侯を見るような感じで威風堂々と並んでい

た。九重山という山は白く欠き取つたようになっていた。これは

硫黄をとっているためであつて一名硫黄山というそうである。黒岳というのは自然林の密生している山で、他の山々と違って格段に黒いのが目に立つ。これらは総すべて九州アルプスといわれる山であるそうだ。その前面に現きたれ来つた高原が即すなわち飯田はんだ高原である。

その飯田高原は奥行二里幅三里ほどあつて、一千町ちようぶ歩あが水田になつているほかはすべて小さい熊笹くまざさの生い繁つた高原である。自動車は路みちでないその熊笹くまざさの生えている所を自由に突破して走りもするのである。石が殆ほとんどなく、いずこでも取つて路とすることが出来るのである。馬に乗つて里さとびと人が通つていると思えば、自動車は路みちをそれて行くことが出来るのである。そんなところが二里も三里もつづいておるのである。

ある溪谷に沿うて白檜しろなら、山梨などという大木の枝に掛け出しが架けしつらえてある。これは熊八氏の工夫になつたものである。そこで昼弁当を開いた。

ここらあたりにも又沢山またたくさんの湯がわいておる。湯坪ゆつぼという村には筋湯すじ、大岳地獄おおたけ、疥癬湯ひぜん、河原の湯、田野たのという村には星ほし生ようの湯、中野の湯、寒かんの地獄、釜くの口温泉くちというのがある。この弁当はその釜の口温泉の小野屋という旅館の主人がこしらえて来てくれたのである。その主人は馬に乗つてこの高原を横切つて来たのである。

歸りに寒の地獄というところに行つて見た。これは冷泉であつて、普通の水よりつめたく、なかにはいると齒の根も合わずふる

えるようにつめたい。男や女の色青ざめて入っているのを見た。
冷却して病を治すという方法もあることかと思つた。

ゴルフ場や飛行機の着陸場はすぐここに出れるようになるうと
いう熊八氏の気焰きえんを聞いた。ここには熊八氏の五万坪ほどの別荘
の敷地がある。

錦鱗湖きんりん

うきぐさゆ 萍の温泉の湧く岸に倚り茂る

自動車を下るおり

なつぐさ 夏草に油あぶら 蝉ぜみ なく山路やまじ かな

ひでり 旱

大夕立来るらし由布の搔き曇り

別府の地下は泉脈が縦横にあつて、熱汽、熱沼、熱湯を噴出するものを地獄といい、適度の温度を保つて湧出するものを温泉といつてゐる。その地獄に血の池地獄とか、鶴見地獄とか、紺屋地獄とかいふのがある。これは熱汽、熱泥を噴出する地獄である。海地獄はそれらの地獄とは異なりて大きな池に熱湯をたたえたもので、その色青藍、大海の色に似ているところからこの名がある。

海地獄は地獄のうちで女王の感じがある。それも他に王様があつての女王でなく、たくさんの他の地獄の悪鬼羅刹を自ら統率し

ておる女王の感じである。

その青藍色の湯池とうちは蠱惑こわく的である。美しさの余り眩惑されて身を投じるものもないとは限らぬ。又また十分の威嚴を備えておる。百二十度の熱湯は儼げんとして人を近寄らしめない。正まさに女王の感じである。

私の日名子氏等と共にここに行つたのは六時半を過ぎていたろう。濛もうもう々たる白煙は熱湯池から立ち上あがつていた。此方こなたより風吹けば彼方かなたの岸になびき、彼方より風吹けば此方の岸になびく。その白煙の隙から後ろの山の翠すい色しよくを仰ぐのも又風情がある。後ろの山もまた整うたたたずまいである。盛装した女王の衣冠いかおむむきの趣がある。

その番人をしておる水戸の藩士の娘でなぎなた薙刀の上手なという
尼子敏子あまこさんに聞いて見る。

「小鳥が鳴いているようですが、あれは何鳥ですか」

「ひわです。他の小鳥もおりますがひわが一番多うございます」
語るもの聞くものしんかん森閑とした景色に耳を澄ます。

「ほととぎすも鳴きますか」

「鳴きます」

しばら暫く話がとだえておつたが敏子さんはなおつけ加えていった。
「この春はきじが二羽巣食うておりましたが、いつの間にかいなくなりました」

「花はどんなものが咲きます。今咲いているのは合ねむ歡の花ですね」

と夕暮の山を見上げていった。

「そうです。それに山桜が多うございます。これからさきは櫛はぜ紅葉みじが美しゆうございます」

この地獄でゆでた鶏卵を食べて見てくれとのこととで一つ食べて見た。店の少女が私たちを見て鶏卵をざるに入れて前の熱湯の中につけた。それが一、二分でもう半熟になつたのである。

貝原益軒の豊ほうこく国紀行に、

その西の山際に海地獄とて池有あり。熱湯なり。広さ二段許ばかり。上の池より湧き出いず。上の池広さ方六間けんばかり許ばかり。その辺岩へんの色赤し。岩の間よりわき出いず。見る者恐る。先年里さとびと人妻その

夫といさかいて大おおにいかりしがこの熱湯に身をなげけるに、
 やがて身はただれさけて、その髪ばかり浮うかび出いず。豊後風土記
 曰いわく、速見郡赤湯泉はやみせきとうせん。この温泉も穴あな郡ごうりの西北竈門山かまどもんやま
 到有あり。その周り十五丈斗ばかり。湯気赤くして泥土有ありと即ち海地獄
 の事なるべし。

とある、赤い泥土であつたのが、今は澄あんだのか、或あるはまたこ
 の赤温泉は今の血の池地獄をいうものか、兎とに角風土記かくは延長以
 前の書物ということであれば、今から千年以前のものであるから、
 どう変化したかわからない。益軒の紀行文にも岩の赤くなつてい
 ることが書いてある。特に湯の清せい澄ちようなことは書いてない。た

だ熱湯の恐るべきことを感じて湯の清澄なことを感じなかったのか、若くは^{もし}その時分は湯は多少濁っておったのか。

夫婦喧嘩をして怒^{いか}った女が飛び込んだのが死骸もとめずにただ髪だけが残ったというのは物すごい物語りだ。今でも転落して死ぬものがあるとのことである。また自ら死するのにこの美しい湯^と池^{うち}を選ぶものも皆無とはいえない。

三

この前来たときこんな印象が頭に残っておる。

それは日名^{ひなこ}子氏に案内されて街の中のどこかの共同温泉^{ゆば}場を見

に行つたとき、私たちの目の前には一人の若い女が現れた。それは裸のまま、腰にタオルをまいて、今湯から上つたところであらう、草臥くたびれてぐったりしたようすで、その縁えんに腰をかけて、後ろの羽目板にもたれかかっているところであつた。そうして手に水蜜桃すいみつとうを持って、じつとその上に目を落おとしているところであつた。この女は西洋絵で見たことのある裸体の女がぬけ出して来たのかと思われた。が、しかしそんなハイカラな女ではなく、この別府の温泉ゆにふさわしい野趣のある一人の女であつた。私はその後別府の町の温泉ゆを思うと、この女を思わずにはおられなかつた。

こんど別府に来て案内記を読んで見ると別府の町の温泉ゆは宏こうそ

壮なる建築だと書いてある。その桃の女がいた温泉は板で囲った古い温泉であったように思う。もしかするとその板で囲った温泉は取り毀わされて、それが宏壮な温泉に変わっているのかも知れない。

地獄を案内してくれた日名子氏が今夜又町の温泉に案内してやろうとのことであった。

もう九時まで待ったが日名子氏は来なかった。私は寢床に入ろうと思った。新らしい町の温泉に桃の女はもういないにきまつているから。

別府の町は今日から祭礼である。きのうまでは宿のすぐ下の家で祭囃しの練習に余念もなかった。寢床に入ってから後までも祭

囃しは聞こえておつた。今日は却てその囃しは聞こえない。先刻どこかで花火が揚がった。あれも祭の花火であろう。

そんなことを考えているところへ日名子氏が見えた。この町の旧家でしかも前の別府町時代の町長であつた日名子氏はお祭りの行列についてあるかねばならなかつたので、たいへん遅くなつたといつた。八年以前も案内に立つてくれた日名子氏にこの桃の女の話をする時、「あれは亀川の四の温泉でした」といつた。それを別府の温泉と思ひ違へたのは、八年の昔のことで記憶がおぼろになつていたためである。

その翌日であつたが海岸の楼上で祭礼を見た。それは一つの船には神輿が乗つていて、一人の男が妙な体の恰好をして太鼓

を打っていた。その他にも男がいたが皆静しずかにしていた。その他の船には矢張り太鼓を打っている男が一人いて、その他の男は皆船を左右に動かしていた。舷ふなばなに殆ど水がはいる位くらいに左右に動かしていた。船には旗が飾り立ててあつたが、その船が左右にゆれるたびに旗が仰ぎょう山さんに左右にゆれた。そんな船が前後に五、六艘そうもあつて、かの神輿みこしの船を取り囲んでいた。これは浜脇にある金刀こと比羅ひら神社の神体が海上を渡御とぎよしているところであつた。

海岸にはその渡御を見んための人々が蟻ありのはうように群集ぐんしゆしていた。やがてその船は皆波止場の中にはいつてしまふと群衆ぐんしゆも漸ようやくその波止場の方に移つて行つた。

日がくれてしまふと一面の闇が海上も海岸の建物も隠してしま

った。ただ平等に真ま暗くらな天地となつてしまつた。その中に灯とも火びのみがきらきらとしていた。海岸には一帯の灯びがあつた。水晶のすだれのような灯のかたまりが港を囲んでいた。その中に篝かり火びが燃え立って、特に煌こう々こうと光り輝やいているものの動いてゐるのは何かと見ると、それは神輿であつた。最前船に乗つて渡御しつゝあつた神輿が今は陸上に上げられて昇かかれつつあるのであつた。群衆のそれを取り囲んでいる容よう子すがその篝火の光に照し出だされていた。

海の上にもまた灯とも火びが散らばつて動いていた。それは多くは赤い火であつた。目の下にも一隻のボートに赤いほおずき提ち燈ようをともして漕いで行くのがあつた。聞けば沢たく山さんの温泉旅宿

の番頭や女中なども十二時を過ぎると皆このボートに乗って海上に遊びに出るとのことである。その赤い灯ひの此方こなた彼方かなたに動いている様さまが涼し気でまた楽しそうに見えた。

欄干らんかんにもたれてその火を見ておると、一人の人がこんな話をした。

春の四、五月の頃になると、山口県の大島郡とか佐波郡とか又また愛媛県の八幡浜やわたはま附近の海岸の村では、一艘そうの船に米、味噌、醬油を積み込んで、二、三十人の人が一団となってこの別府に来る。帆を掛けては行って来たその船は、波止場に繋いで、三週間ばかり滞在する。その間それ等の人は勝手に共同温泉には行って、夜はこの船に帰って寝る。船では「大島郡何々村」と書いた大きな

札を帆柱に打ち付けて置くと郵便配達夫はその船まで郵便物を配るといふ風であるそうなる。時には御詠歌を歌つて町をあるいて一錢二錢の報謝を受ける。一円か二円たまると、それで寄席にはいるとか、氷こおりみず水を飲むとかするのを樂たのみにしているそうなる。一人五くら五円位の費用で三週間入湯して行くことが出来るのだそうなる。

亀川の四の湯に桃の女はまだきつといふ。

ひなこ
日名子氏が案内にたつて大分市の元町にある磨崖まがいの石仏を見に行くことになつた。折おりふし節同宿している五十嵐播水ばんすい君も共に。

午前七時に宿を出た。途中にちよつと立ち寄つたところがあつ

たので、電車で大分駅の前に着いたのは九時を過ぎる十分か二十分のころであつたらう。それから人力車に乗つてその元町へところざした。元町というのは大友氏時代うじに古い町があつたという意味であらうが、今の^{ほん}大分市としては殆ど郊外になつていゝるのである。車はぞろぞろと田圃たんぼの中の道を行くのである。折からのひでりで百姓の家族は皆畑かんがいに出て灌漑用水をいちいち汲み上げては田の中に注いでおる。子供は裸のまま、男は禪まわし一つで、女は編笠をかぶつて、せつせと働いているさまはたのもしげである。右手に見える竹藪がお竹藪とよと称えて大友の屋敷跡であると日名子氏が説明してくれた。やがて元町の石仏についた。

その石仏は中央に大きな薬師如来、左右に不動明王、毘沙門びしゃもんて

天んのかなり大きな像が彫つてあるのだが、凝灰岩の粗質な岩に彫つてあるため左右の像は首が落ちたり磨滅したりして殆ど原形を存しないのであるが、ただ中央の薬師如来だけは、片頬に大きな傷のあるほかは、まず完全な形を存しているといつて好い。殊ことにそのそこなわれざる方の半面を見ると、端麗な相は鎌倉の大仏に似て更に柔和であるように思われた。たいへんに暑いので、暫しばらくその岩蔭にたたずんだ。風はなくともどこことなく冷え冷えするので暫く息をついた。

それから竜ヶ鼻の十一面観世音その他の仏が沢山たくさんに彫つてある磨崖まがいぶつ仏を見た。これは殆どほとんこわれてしまつて僅わずかにそれと認めらくらい位のものである。聞くところによると、昔乞食がすまつていて、

その乞食小屋が焼けたために、岩の質が更に脆ぜいじやく弱やくになつて、さらでだに破損した仏は、いよいよ破損してその形をとどめぬまになつたのであるそうな。

これから二里ばかり離れたところにもたくさんの磨崖仏があるし、又白杵またうすきのほとりにもたくさんの磨崖仏があるとのことであるが、一々それを見に行くのは暑い時分にたいへんなことである。

私はこの二ヶ所の仏を見ただけで満足して引返すことにした。

この竜ヶ鼻に立つて遠望すると田の中に一つの森が見える。この森を印いんやく鑰やくの森という。これはもと豊後ぶんごの国府のあとで、今は稲荷が祀つてある。又国分寺はここから一里半位のところに堂が存しておつて、礎石が点々とそのあたりに残つてゐるそうである。

私達は又車に乗って暑い日中をさきの停車場前に帰り、そこからまた電車に乗って別府の方に帰ることにした。

日名子氏は、夕方涼しくなった時分にでも、別府市の近所の山にある横穴の古墳を見てもらいたいとのことであつた。私はどうせ見るのならば又出て来るといふのも面倒だから、この勢いに歸りに寄つて見ようといつた。そこで五十嵐君は今日の紅丸くれないで神戸に歸るとのことであつたので途中で別れた。私と日名子氏とだけが浜脇で下車して、その腰掛茶屋で蠅のたかつておるすしと生卵で腹をこしらえ、金比羅山の南北両方面にある横穴すなわ即ちカンカぼとけン仏の横穴およびその附近の横穴を一見した。非常に暑かつた。谷間をたどつておるときなどは蒸し殺されそうに暑かつた。ただ

カンカン仏を見終つて附近の山の背に出たときに、一陣の涼風が松の枝間えだまを吹いて来て、覚えず蘇生したような思いがした。暫くしばら芝の上に腰を下して休んでいると、初めはそよそよと吹く風と思つたのが、なかなかにそれどころでなく、今は涼風を満喫するよ
うな心もちでいつまでも立ち去りがたい心地がした。ブーンとあ
ぶが耳元をかすめて飛ぶのも快よいひびきに聞えた。夏蝶のひら
ひらと茅萱かやの上を飛んでいるのも涼しげな趣きに見えた。一本の
蝙蝠傘こうもりがさが谷川の蘆あしの間を此方こちらに来るのは何かと見てみると、や
がてその蘆間から現れ出たのを見ると、その蝙蝠傘の大きいのに
は似合わない一人の洋服を着た少女であつた。此方を向いて歩い
ていると思ううちに又またいつか向うむこの方を向いて歩いていて、その

曲りくねった田圃路をたどりつつあるのである。

ひゆうが

日向の国は日本で最も古い国である。お隣のこの豊後の国もまた古い国であらねばならぬ。その古い国という証拠は、この磨崖仏や横穴の古墳があることによつて証明せられる。

私はその少女のやがて向うの岨道そばみちをたどりつつあるのを静かに目送した。

別府市長の神沢かみざわ又一郎氏が来訪した時、いろいろの話を聞いた。

鉄道線路から下の方すなわ即ち海岸に近いところは、掘ればいくらで

も温泉が湧出するそうである。浅いところは十二、三間げん深いところは六十四、五間掘ればよいので、深いところほど圧力高く温度が強いとのことである。

現在千四、五百の温泉が湧出しているそうである。現在あるところから四十尺以内には新らしく温泉を掘ることを禁じて濫掘らんくつをいまして、掘るとのことである。

鉄道線路から上の方即ち山手やまての方は、掘っても温泉はたやすく出ないそうである。麻生太吉氏はその持っている山手の地面を別荘地として各戸に温泉を配布するために、別に湧出する冷泉を鉄管に引いて鶴見地獄の熱汽ねつきの間を通し温泉をつくることにしたそうである。二個の鉄管を熱汽の中に六尺か十尺の間通すことによ

つて、優に所用の温度を与えることが出来るそうである。それほどその熱汽の熱度は高いのである。現在の鶴見地獄は沢山たくさんの熱湯を噴出している形だが、これも熱い熱汽の中に人工的に水を加えているのだとのことである。

来年四月別府に開かれる中外産業博覧会が特に温泉室なるものを設ける計画であるが、この麻生氏の一本の鉄管、即ち一分間四石こく、六十度の温度のものを借うけることになつているとのことである。

この熱汽を吐いておる地獄は、竈かまど、血の池、紺屋こうや、鉄輪かんなわその他にもある。熱汽に水を通して温泉とすることが出来るのならばまた新温泉は無数に出来るわけである。

朝からごうごうと飛行機が宿の上を飛ぶ。これは別府の海にかんでおる水上飛行機が十分間十円で客を乗せて飛ぶのだそうである。油屋熊八氏はこの飛行機に乗って八景入選の喜びを大阪まで述べに行き、帰りには別府に寄らずすぐ長崎を訪い、「西に雲仙東に別府中に火を吐く安蘇あその山」という俗謡をつくって国立公園の宣伝に努めている。頃けいじつ日また鶴見のふもとの扇山むいこの向う側に、小上高地かみこうちともいうべき一大渓谷があるのを発見したのと、氏自身二、三日のうちにこれが探検に出かけて行くといっていた。氏は弱冠六十五歳である。

別府の海には今二、三隻の軍艦が繋がっておる。船腹についたカキは別府湾の潮に浸ると忽たちまち腐くさって落ちて仕舞しまうのである。水

兵は嬉々^{きき}として町の中を歩いておった。

鉄筋コンクリートの市の公会堂が新築されつつある。内容の設備は九州第一だと誇称しておる。浜脇温泉は新築工事を成すべく地鎮祭を行った。

宿の吾^わが部屋の真正面に聳^{そび}えているものに高崎山がある。この山は由布^{ゆふ}、鶴見などの山系とはやや離れて、別府湾頭にひとり超然として聳えておる。吾^われ関せず焉^{えん}という風^{ふう}に。

その姿も好い。西洋人はこの山をヘルメツトの山というそうである。

朝は一面に靄^{もや}がかかつてその山容は殊^{こと}に柔かく見える。太陽が昇るに従つてはつきりと見えて来る。

雨が降ると必ずこの高崎山に雲がかかるといふ。この高崎山に雲がかかると雨が降るのかも知れない。わが部屋の軒のきいっぱいにひろがっているように感ぜらるるときもある。またそうでないときもある。

高崎山には猿が棲んでおるそうである。そうしてここは禁猟区になっておるので、猿は年々蕃はんしよく殖するそうである。

高崎山には古城跡がある。それは何代目かの大友氏うじが築いた城である。

高崎山の木が茂っているところには魚族がその蔭に集まって漁が多いとのことである。

この座敷に坐っていて、一日の炎暑が漸ようやくかげろうとする時分

になると、この高崎山に黒い影がうつりはじめる。それは日の西に入るとき鶴見の高峰が投げる影であろう。

高崎山は四極山しはつというそうである。万葉集に

しはつ山打越うちこえくれは笠縫かさぬいの島漕こき帰る棚なし小舟せふね

たかいちむらじくろと
高市連黒人

とあるのはここだともいうし、それは摂津せつの磯齒津山しはつを詠んだともいう。

私がまた紅丸くれないに乗ってこの別府を去るときには、海地獄の噴煙を遠く松林の中に眺めてしばらく甲板にたたずむであろう。そう

してその目は必ずこの高崎山に転ずるにきままっている。高崎山は
永く永く私の目から離れぬであろう。

夕立待つ高崎山と諸共に

火の国の筑紫の旅の日焼かな

日焼せし旅の戻りの京の宿

青空文庫情報

底本：「日本八景 八大家執筆」平凡社ライブラリー、平凡社

2005（平成17）年3月10日初版第1刷

底本の親本：「日本八景―十六大家執筆」大阪毎日新聞社・東京
日日新聞社

1928（昭和3）年8月15日再版

※「趣」と「趣き」、「吾《わ》が」と「わが」、「新らしく」と「新しく」の混在は、底本通りです。

入力：岡村和彦

校正…sogo

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

別府温泉

高浜虚子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>